GEB ss　～極東の帝王譚～

clow

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＧＥＢ　ｓｓ　～極東の帝王譚～

【Ｎコード】
Ｎ８８８２Ｖ

【作者名】
ｃｌｏｗ

【あらすじ】
前作、『神を喰らう者たち』の続編です。前作をお読みいただいたほうが、より楽しんでいただけるかと思いますが、前作を読んでいない方も、どうぞお気軽に読んで下さいませ。
前作と違って、短編などを多数載せる予定です。

第1話

ゼノン達は今、かつて家だったであろう瓦礫のそばに立っている。
また、一つの町が、アラガミによって潰された。
この？町？というのは、フェンリルの庇護下にある外部居住区ではない。第一、フェンリルの力が及ぶのは、支部周辺の外部居住区と、その更に外部の神機使いを派遣できる限られた範囲だけである。

「・・・見るに耐えない、ですね」
「そうだね・・・」
「・・・」
「・・・仕方が無い、俺たちは万能じゃないんだ。守るつったって限度がある」
「ですけど！」

今回被害にあった町の人口は、約１５０人。見れば細々とした畑もあり、自給自足の生活をしていた事が窺えた。
彼らは何故、外部居住区へ移住しないのか。理由としては多々あるが、その中でも特に

―慣れ親しんだ故郷を捨てられない―

―居住区が安全とは限らない―

―フェンリルを信頼できない―

が、多数を占めている。また、ただでさえ物資不足の世の中・・・後からきた人間にとって、外部居住区は暮らしやすい場所ではなかった。そんな一同に、捜索班から声がかかる。

「すいませーん！」
「どうした、とり逃しがいたか？」
「いえ！生存者発見！ですが瓦礫の下になり、我々だけでは如何せんどうにも・・・」
「わかった。今行く」

「せーの！」

ゼノンの掛け声に応じて、神機使い一同が力を込める。

「もう少し・・・」
「うう・・・」
「コウタ、もう少し力を入れろ」
「これでも頑張ってるんだよ・・・！」
「いまだ！つっかえを突っ込め！」
「「「そぉーれ！」」」

ゼノン達が作った隙間に、大きな柱が衝立として挟み込まれる。そうして維持された隙間から、十数人の生存者たちが救出された。

「なんで・・・」
「あ？」
「なんですぐに来てくれなかったんだ！？」
「・・・甘ったれるな。お前らこそ、何時かこうなる事はわかっていたはずだ」

思いかけずこぼれた男性の罵倒に、ソーマが静かに言う。助けられた男性は反論できない。彼が言っている事は正しいのだから。

「・・・・・」
「・・・そっちこそ、何で外部居住区に来なかった？」

今まで黙っていたゼノンが口を開いた。

「それは・・・生まれ育ったこの土地を・・・」
「悪い事は言わない、外部居住区に来い」
「・・・でも」
「死にたかったら、ここにいろ」

「リーダー！？」
「それって言いすぎだよ・・・」
「現実を見ろ。過去に縋り付いたところで何も変わらない。またこうして襲われるのが関の山だ」
「だが・・・」

「伝令！付近にコンゴウの群れを確認！真っ直ぐこちらに向かっています！」

一瞬で場の空気が張り詰める。そんな緊張した空気にまったく影響されず、ゼノンはゆったりした口調で聞く。

「数は？」
「４体！コンゴウは外部に避難したほかの生存者を襲っている模様！」
「そんな・・・」
「はぁ・・・面倒くせぇな」
「・・・行くぞ」
「ああ」

十人ほどの集団が、二体のコンゴウに追いかけられている。その最後尾は幼い子供とその母親。そのすぐ前にいる男性が、励ますように声をかけた。が

「走れ！町にはゴッドイーターが来ているはずだ！そこまではし、うわ、ぎゃあぁぁ・・・」
「あっ！」

その男性を、勢いよく転がってきたコンゴウが轢き、さらに動けない彼を貪ろうとする。

「走りなさい！後ろを見たらだめよ！」
「でも！」

グオオオ！

「来るぞ！！」
「きゃあぁぁ！？」

ガアァァ！！

ドォン！

「うわっ！？」
「ぎゃあぁぁ・・・」
「あぁぁぁ・・・腕が・・・足が・・・・」

コンゴウから放たれた空気の弾丸『エアブロウ』が、集団の前方に着弾し、数人を吹き飛ばした。

「いてっ・・・」

最後尾に居た少年が、飛んできた石につまずいて転んでしまった。とっさに振返ると、先ほどまで１０ｍほども離れていたコンゴウが、目と鼻の先までに接近していた。あまりの恐怖で身動きできない少年に、コンゴウが襲い掛かる。

グオオオ！

「うわぁぁぁ！？」

ザシュッ！！　グギャアァァ！？

コンゴウの悲鳴が、あたりに響き渡る。恐る恐る目を開くと、少年の前に一人の青年がいた

「・・・立て、坊主」

「え・・・」
「まだ、走れるだろう？」
「う、うん・・・お兄ちゃんは？」
「俺か？俺は大丈夫だ」
「ゴッドイーターだからな」

そういうと見知らぬ青年は少年を襲っていたコンゴウに、手に持った巨大な武器で、再び一太刀浴びせかけた。

「ゴッド、イーター・・・」
「行け、ここは危ないぞ」
「うん！」

「リーダー！」
「他の二体は？」
「ばっちり！襲われてた人の誘導も終わったよ！」
「わかった。それじゃ、さっさと終わらせて帰るぞ」
「「「了解！」」」

少年の耳には、リーダーと呼ばれる青年の優しげな声と、ゴッドイーターと言う単語がこびりついていた。

付近のアラガミを掃討し、いよいよ帰還すると言った時間、あの少年がゼノンの元にやってきた。

「ねえ、隊長さん」
「なんだ？」
「さっきは有難う！それでね・・・ゴッドイーターって、どんな人なの？」
「そうだな・・・弱きのために、強きを喰らう・・・・」
「？」
「ふっ・・・まだわかんねぇか」
「でも、すごく強いんだよね！あんな怪獣を倒せるんだよね！」
「ああ、その通りだ」
「どうやったらなれるかな？」
「どうしてゴッドイーターになりたいんだ？」
「お母さんたちをね、今度は僕が守りたいんだ！」
「そうか。なろうと思ってなれるものじゃないけどな・・・もし、お前がゴッドイーターになれるとしたら、、そのときはアナグラでまた会おう」
「うん！」

「隊長さん・・・」
「・・・決まったか？」
「はい・・・私たちも、外部居住区に住ませてください」
「わかった、上に掛け合ってみよう」
「有難うございます！」

アラガミは、恐らく消える事はないだろう。そして、彼らの戦いにも終わりは来ないかも知れない。

だが、それでも彼らは戦い続けるだろう。

少しでも、この手で命が守れるのなら・・・『有難う』の、その言葉が聞けるなら。

この話は、極東の帝王と讃えられた一人の神機使い「ゼノン・ジョーカー」の物語。

雨宮リンドウ氏の帰還に大いに貢献した、彼のその後の活躍をここに記す。

第1話（後書き）

いきなりシリアスネタ・・・もう少し明るい出だしがよかったなぁ
↑おい

これは少し前に書いて、投稿するタイミングがつかめなかった作品です。

これからは、オリジナルアラガミなどを交えていきたいと思いますのでご期待ください。

感想、ご意見、誤字指摘やリクエストなどもお待ちしております。

第2話～ｖｓタケミカヅチ　序章～

―贖罪の街―

贖罪の街の入り口、そこに四人のゴッドイーターが居た。そのうち三人は、傍目から見てもわかるほど緊張している。そわそわと辺りを見渡し、何度も神機の様子をうかがっている。

「なぁ、早く行こうぜ！」

気が立っているこの少年は、『荒幡（あらはた）　シンペイ』十五歳、旧型バスターの適合者だ。

「ええと・・・シンペイ君、だっけ。上官さんなんだから、敬語・・・」

「俺の勝手だろ！？」

「え、あ・・・ごめん・・・」

シンペイに提言して、やり返されたこの控えめな少女は『春風　コトミ』十六歳、新型可変式の適合者で、刀身はショート、銃身はスナイパーを使用している。

「・・・もう少し、静かにできないの？」

「うるせぇ！初の実戦なんだから仕方ねえだろ！？」

「あーはいはい、静かに！今からブリーフィングやるよ！」

さらに苦言を呈したのは、旧型ブラストに適合した『篠垣（しのがき）　コウジ』十五歳。常に冷静で、どこか大人びた少年だ。それを取り纏めているのは、第一部隊狙撃曹長・宵河茜である。本来ならこの任務、リンドウが担当するはずだったのだが、前日に現れたウロヴォロス堕天討伐へと急遽出撃したため、今日は休暇が与えられ、代わりに茜が新人育成任務に向かうことになった。

「そんなのどうでもいいじゃん、さっさと行こうぜ！」

「・・・・良いわけないだろ、馬鹿か君は？命がかかってるんだぞ？」

「ああ！？」

「うるさい！！」

「「・・・・・」」

「あう・・・・」

茜が一喝すると、二人とも静かになった。だてに此処まで生き残っている訳ではない。普通の女性がどなる数倍の迫力が、彼女のそれにはあった。

「それじゃ、まず目標の再確認よ。今回の目標はオウガテイル５体。こいつらは基本、３体から４体の群れで行動してるわ。最新の情報によれば、うまい具合に東と南にそれぞれ２体と３体に分散してる。これを、それぞれあんた達が叩く・・・最初にあたしが見本見せるから、残ったのを各自一人で倒すこと」

「はいです！」
「了解だ」
「はいはい・・・」

そして最後に、と茜が付け加える。

「うちの隊の鉄則が四つあるから、それを教えておくね・・・
死なない事
死にそうになったら逃げる事、それで隠れる事
それで、運がよかったら不意を衝いて倒す！」
「・・・・・」
「なんだよ、逃げてばっかじゃん・・・」
「あ、解りました・・・」
「それじゃ、いこっか！」

「後ろ！危ない！！」
「え！？う、うわぁっ！！」

ドォン！

「ぼさっとするな」

「わ、悪い・・・」

「えい！やぁっ！！」

ギャァァァァ・・・・・

コトミが、最後の1体をナイフで仕留める。そこで緊張の糸が切れてしまったのか、コトミとシンペイはその場にしゃがみ込んでしまった。さっきまで冷静だったコウジも、袖口で額の汗をぬぐっている。

「みんな、お疲れ様！なかなか良かったよ、午後もその調子で頑張ってね！」

「あーそうだった・・・午後も任務あるんだった・・・」

「なんだか・・・私、先輩たちに追いつける気がしないです・・・」

「ふん・・・少し休めれば、どうということはない・・・」

「ほら！まだ任務は終わってないよ！倒したアラガミからコアを摘出しないと」

ピピピ、ピピピ

「通信？」

茜が腰に下げているポーチから機械音が響く。取り出したそれは、部隊長用の通信端末だった。

「はい、こちら茜」
『俺だ、今どこにいる？！』
「ゼノン？」

通信の相手は、『極東の帝王』こと極東支部随一の神機使い、ゼノン・ジョーカーだった。しかし、声色からかなり焦っている様子が見られる。緊迫した空気が、端末越しに伝わってきた。

『今は任務中だろうが・・・まあいい、辺りに異変は無いか？』
「特に何もないよ、どうかした？」
『落ち着いて聞け、実は――――――』

知らせを聞かされた茜の顔が、見る見るうちに強張っていく。いい知らせでない事だけは確かなようだ。

「わかった、今すぐ帰投するね」
『気を付けろよ』

「みんな？コアの摘出は終わった？」
「はい、終わりました」

コトミが皆を代表して言う。

「それじゃ、今から帰投するけど・・・ちょっと急ぐからね」
「どうかしたんですか？」
「んー・・・少々厄介なことになっちゃって・・・それはいいから、走る走る！」
「了解」
「けっ・・・せっかちだなぁ・・・」
「戦場での移動の遅れは、部隊の命取りになる・・・急ぐのは当たり前だろう」
「ちっ・・・いちいち偉そうに・・・」
「そこ！ぶつぶつ言ってないで、移動に集中する！」
「了解」
「へいへい・・・」

無事、帰投ポイントまで戻った茜達は、そそくさと車両に乗り込みその場を離脱する。誰もが皆、安心してアナグラへと向かっている。

しかし、神は非情だった。

「や、やばい・・・」

運転手が、焦りに顔をゆがめる。助手席の茜が、何事か、と問いかけた。

「どうしました！？」
「緊急通信だ！レーダーに、でかい反応が一つ・・・こいつがさっきの無線の・・・」
「っ・・・迂回路は？！」
「今探しているが・・・・・・あった！ちょっと道が悪そうだから、しっかりつかまってなよ！」

ガタンッ！ゴトゴトッ！！

車内が激しく揺れる。

「あたた！？なんだよもう・・・来るときこんなに揺れなかっただろ！？」
「なんか、茜先輩も急いでたみたいだけど・・・何があったのかな？」
「・・・不測の事態」
「え？」
「たとえば、予定外アラガミの乱入とか」
「ええ！？」
「そ、そんなことがあるのかよ！？」
「話に聞いたことがある。なにしろ、奴らは神出鬼没だからな」
「こ、怖い・・・」
「へん！俺が返り討ちにしてやるぜ！」

「絶対に無理だな」
「なんでだよ！？」
「その乱入してくるアラガミというのは・・・・」

キキィィッ

急ブレーキがかかり、車両が横転しかけながらなんとか停止する。
そして、彼らの耳に恐ろしい雄叫びが聞こえてきた。その声だけで、3人が3人とも恐怖に顔が引きつってしまうほどのアラガミ。まるで、本能的に体が拒否しているようだった。

「きゃぁぁ！？」
「な、な、なんなんだよ・・・声だけで、ここまで怖気づいちまうもんなのか・・・！？」
「・・・その乱入してくるアラガミのほとんどは、接触禁忌アラガミ。そこらの奴らとは一線を画する、とてつもなく恐ろしい相手だ」

Ｓｉｄｅ　茜

迂回路を急ぐあたしたちの前に、巨大な影が立ちふさがった。

背中には巨大なブースター

篭手の代わりに、両腕に備え付けられた仕込み刀のようなブレード
獰猛な紅い瞳と、一対の角

グギャアァァァ！！！

「氷の皇帝・・・カリギュラ・・・・」
「ちっ・・・もう見つかってたってわけか！？」

さっきのゼノンの無線・・・それは、あたしたちがいる地域に、第一種接触禁忌アラガミ『カリギュラ』が現れたって知らせだった。カリギュラ自体は何か月か前に、ほかの支部で確認報告と討伐記録があったけど、極東ではこれが初めての接触・・・運がいいのか悪いのか。ううん、間違いなく悪い方だよね、これ・・・

（どうしよう・・・）

カリギュラは、じわじわとこっちににじり寄ってくる。ああ・・・なんか頭痛い。これが編喰力場の影響ってやつなのかな・・・

「ど、どうするお嬢ちゃん！？あんたはあれとは戦えないんだろ？！」
「はい・・・」

今更ながら、自分の非力さが恨めしい。仕方がないと理性では理解していても、感情の方が納得してくれない。

あいつがいたら・・・

「！　そうだ！もうすぐ隊長たちが来ます！それまで逃げ切れませんか？！」

「やってみよう・・・！」

車をバックさせ、急発進して元の道を帰り始める。お願い、早く来て・・・

ゴオォォォ！

「そ、そんな・・・」

「滑空して先回りされちまった・・・！！」

グオアアァァァ！！

まるで『逃がさない』って言ってるみたい・・・終わり、なのかな・・・

「・・・・こっちだ」

そうやって絶望に飲まれかけたとき――――――やっと彼は来てくれた。

カリギュラが、声につられて上を見上げる。その頭を、一人の神機使いが飛び降りざまに斬り付けた。そしてもう一人が、胴体に深々と捕喰形態を喰い付かせた。

グギャアァァアアァァァ！？

「貰った・・・！」

バーストモードに移行すると、素早く飛び退くフードの神機使い。その神機使いに、すべてが漆黒の装備で固められている神機使いが呼びかける。

「行くぞ、ソーマ」

「ああ・・・」

彼らこそ、ここ極東での最大戦力ともいえる、ソーマ・シックザールとゼノン・ジョーカーだ。

「よかったぁ・・・間に合った・・・」
「茜上官」
「あ！ごめんね、無茶苦茶な運転して！」
「それはいいです、救援が来たんですか？」
「うん、うちの最強コンビがね！」
「見学させてもらっても・・・？」
「覗き窓から見える範囲ならいいよ。でもそれ以上はダメ、危ないから」
「はい」

「あれが・・・極東の生ける伝説・・・」
「す、すげぇ・・・あんな化け物相手に、対等にやりあってる・・・」
「・・・・・」

コトミの方は、あまりの緊張と恐怖、そこに編喰力場の影響もあって気絶してしまっていた。対して少年二人は、目の前で繰り広げられる激闘に目を奪われるばかりであった。

３０分後――――――

グ・・ウ・・・・ギャオオォォォ・・・・・・

「よし、終わりだな」

「何度でも叩きのめしてやる」

初めて戦う相手だというのに、そんな事をまったく感じさせず、二人は皇帝から勝利をもぎ取った。

「いてて・・・只でさえハンニバル種は戦闘力が高いってのに、カリギュラのあれはルール違反だろ」

「もともとルールなんて、あいつらには有って無いようなものだろ？」

「違いねぇ・・・さて、帰って寝よう」

―輸送用トラック内―

「ありがとね」

「あ？ああ・・・間に合ってよかった、この一言だな」

「あたしも一瞬ダメかと思っちゃった」

「最後まで諦めるな。諦めなければ活路は自ずと開く」

「それはお前の経験か？」

「まあな」

そんなことを話しながら、アナグラへを帰投するゼノン達。新人たちは先ほどまで起きていたのだが、初任務の疲れの上に接触禁忌種と出くわしたことによる心労も重なって、一人二人と眠りに落ちた。

「今年の新人は期待できそうか？」
「まあまあ、ってところかな」
「死ななければそれでいい・・・少しでも長生きしてれば、自然といい神機使いに育つ・・・」
「それもお前の経験か？」
「お前だって知ってるだろ？」
「ふっ・・・そうだな」

そんな話をしていると、いつの間にかアナグラに到着していた。そしてアナグラでは、ある人物たちがゼノンの帰りを待っていた。

―アナグラ、エントランス―

「新人育成班、及び救援班・・・・今戻った」
「あ、お帰りなさいゼノンさん！ご無事で何よりです」
「よ、戻ったか。大変だったな、カリギュラだって？」
「ああ・・・面倒な相手だった」
「お前にかかれば、どんな奴でも面倒の一言で片づけられちまいそ

うだな！」

一階で防衛班の面々と談笑していると、上の階から聞き覚えのある声が聞こえてきた。

「やあ、ゼノン君」
「久しぶりだなぁ！」
「あんた達は・・・」

ＦＳＡＴ中隊長、ヴァリス・クロノアとウィリアム・ジストーであった。階段を下りて自己紹介を兼ねた挨拶をその場の神機使い達にしていく。

「何度来ても結果は変わらないぜ」
「そう邪険にしないでくれるかな。今回は勧誘に来たわけじゃなくて、君の力を貸してほしいと思ってね」
「勧誘とどこが違うんだ？」
「榊博士との契約でね。いざというときは、君を貸してくれることになっているんだよ」
「・・・・・あの狐目野郎」
「まあまあ・・・・」

なだめるようにヴァリスが苦笑する。

「今回の相手はちょっと・・・いや、かなりやばい相手でね」
「指定種か？」
「ああ・・・名をタケミカヅチ。スサノオの上位進化種だよ」

第3話～帝王、動く～（前書き）

はい、作者です。なんか指が動かない・・・二日に一遍ぐらいで進めていきたいんですがね。しかもちょいっとgdgd進行・・・・ほかの小説も進まないｏｒｚ。

それでは、どうぞ。

第3話～帝王、動く～

一台のヘリが、極東支部のヘリポートから飛び立った。中にはもちろん、ゼノンとヴァリス、ウィリアムが搭乗している。

―輸送用ヘリ内―

「そう言えば、ご結婚おめでとう」

ヘリポートにただ一人、見送りに来た茜を眺めているゼノンに、からかうような笑みを浮かべてヴァリスが言う。

「からかってるつもりか？」

「いやいや、心から祝福するよ」

「どうだか・・・・・仕事柄、一番死ぬ確率が高いからな、俺は。丁度よかったから、リンドウさん達に便乗したんだよ」

含み笑いを浮かべるヴァリスを、面白くなさそうに眺めるゼノン。そこへパイロットのウィリアムが話を振ってきた。

「どうだ？」

「・・・勝算の話か？」

「もちろん！」

「さぁな・・・実戦で、本気の奴をまともに相手にしたことがないんだろ？」

「そりゃな、奴がきれる前に撤退しちまうからよ」

そう言われて、ゼノンは支部長室で見せられた資料を思い出す。

―支部長室―

「これが、そのタケミカヅチの簡易的なレポだ」

「ん、わざわざすまないな」

「なになに・・・」

―――タケミカヅチ：『刃蝕皇』について――――

――――まず、その生態は至って凶暴。外見的特徴としては、スサノオのそれと酷似している。しかしながら、前腕部及び脚部が神機の刀身化しており、各部位は『尾の先――ショート』、『脚部――ロング』、『前腕部――バスター』の様に変化している――――

そこまで読み進めて、ゼノンが呆れた様な声を上げる。

「随分と攻撃・・・しかも近接に特化したアラガミだな」

「その分、頭部なんかの装甲も強固になっているよ」

「面倒な奴だ・・・」

さらに読み進めていくゼノン。

―――このアラガミの偏食傾向は神機の刀身に向けられており、討伐隊は遠距離型を中心に編成することを推奨する。また、このアラガミには遠距離に対する攻撃手段がないため・・・―――

「おい」
「なんだい？」
「ＦＳＡＴには遠距離特化はまだ居ないのか？」
「いるよ」
「ならそいつを中心に・・・」
「それならこっちも考えたさ。でもね・・・」
「全滅、か」
「舐めないでくれるかな、そこまではいってないよ。でも、それに近い状況だったね」

ヴァリスによれば、遠距離特化二人、通常４人、新型二人での中隊編成が、一度タケミカヅチ討伐に向かったらしい。先制はもちろんこちら、集中攻撃で頭部の兜を叩き割ったらしい。そこまではよかったものの、それから後が悲惨だったそうだ。

活性化による帯電と、まさに雷のような素早い動き。

文字通り電光石火の動きだったそうだ。こちらに大きく跳躍すると、着地と共にその巨大なバスターを振り下ろす。直後に長大な尾が撓(しな)

り、その一撃で新型以外がダウン。残った二人が、スタングレネードと各種トラップを駆使して、這う這うの体で撤退してきたらしい。

「銃撃も何回かしたらしいけど、弱点の頭部以外では目立ったダメージは与えられなかったらしいぜ」

「近接は強固な外殻と、法外な攻撃力が危険極まりない上、神機を捕喰されかねない。かといって銃撃部隊中心で行くと、一気に詰め寄られてお陀仏・・・厄介――――この一言だな・・・」

おめでとう、タケミカヅチ。『面倒』から『厄介』に格上げ（？）だ。

「それと・・・榊博士、あれを頼めますか？」

「ええと・・・・・はい、これだね？」

榊が端末を操作すると照明が落ち、壁から中型のディスプレイがせり出す。そこに映し出されたのは――――

「・・・・・」

「言葉が出ねえか？まあそうだろうな。なにしろあのウロヴォロス堕天種が、一方的に屠られてるんだからよ」

一体のタケミカヅチが、その刃でウロヴォロス堕天を切り刻んでいる映像であった。ウロヴォロス堕天の極太レーザーがタケミカヅチ

に直撃、そのまま仰向けに吹き飛ばす。が、タケミカヅチは、それがどうしたと言わんばかりに勢いよく起き上がった。そしてそのままジャンプすると、足の剣の切っ先をそろえ、ウロヴォロス堕天の触手を引き裂いていく。

――ヴォオォオォォ！？――
――ギャゴオォォォ！！！――

痛みに悲鳴をあげるウロヴォロス堕天を、さらに尾のショートで滅多刺しにするタケミカヅチ。

「・・・もういい、強さはよくわかった」
「そうかい？」
「仕方ねえ・・・場所は東南アジア支部だったか？」
「ついに、出撃てくれるんだね？」
「放っておいて、こっちに来られても困るしな」
「ありがとよ！」

―輸送用ヘリ内―
「ゼノン君」

ヴァリスの一言で、回想から引き戻されるゼノン。

「君の支部には君以外に二人、指定種と戦える神機使いがいるのだろう？」
「今は三人だな」
「奇跡的生還を果たしたという雨宮少尉かい？」
「ああ」
「それと、あのフードをかぶった青年・・・ソーマ君だっけ？」
「その通り」
「もう一人は誰だい？」

そう問いかけられた瞬間、ゼノンが顔を顰める。

「いや・・・・ピンク色の髪をした、ちょっと控えめな女の子に会ったか？」
「ああ、眼帯をした子と一緒に居たね」
「そいつだ」
「名前は？」
「『極東の誤射姫』・・・と言えばわかるか？」
「ははぁ・・・あの有名な。たしか台場カノンさんだっけ？」
「だな」
「そこまで酷いのかい？」
「例えば――――」

――――――――――――――――――――――――――――――

――――――――――

俺がハンニバル相手に無理やって、神機に変調をきたしていた時期があった

その時、あいつに頼まれて射撃訓練に付き合ってやったんだが・・・・

―訓練場―

「あ、あの、よろしくお願いしますね！」

「よし、まずは止まっている的だ」

丸いターゲットを出現させて、カノンの数m前に設置する。

（これを外したら話にならんぞ・・・・）

「えいっ」

ふむ、止まった的には的確に当てられるようだな。

「次、動く的だ」

同じ距離で今度は動く的、連続して三つが出現するようセットしておく。

「いくぞ」
「はい！」

「え、えーと・・・えい！」

「うぅ・・・そりゃ！」

「・・・おらぁ！！」

うん、なんか最後があれだったけど問題ない。

（こうして見ると、命中率はそこそこ高いんだがな・・・・）

事実、今までの訓練ではサクヤ、ジーナに次ぐ命中率を誇っている。

（・・・試してみるか）
「次は二個同時に行くぞ。今回は、手前のは壊さないようにして奥のだけを狙え」
「えー、なんでですかぁ？」
「手前の的を仲間だと思え。命中率は悪くないんだ、あとは細かい

コントロールだけ・・・今回はそこを重点的に行くぞ」
「そういうの苦手なんですけど・・・」
「泣き言言うな」

「行くぞ」

そうして、二個同時の訓練を五分ほど続けてみたが

「なんど言えば分るんだ？奥の的だけねらえっつったろ？」
「え、あ、でも・・・」
「ハイもう一回」
「ぐぬぬ・・・」

ふわ～　ふわ～

「・・・・おりゃぁ！！」

ドォン！！

「おら、次だせや！！」
「・・・は？」
「さっさとしろぉ！！」
「・・・・・」

裏カノン、出☆現

「おらおらおらっ！！！」
「もう嫌だ、こいつと組みたくない・・・・」

――――――――――――――――――――――

「ははは・・・それはまた、豪快だね・・・・」
「それだけじゃないぞ、バレットを組み立てる時も、ホーミング弾がわけわからん方向に向かっていきやがったんだ」
「なんとまあ・・・」
「終いには、上向きに設定した弾が真横から飛び出るという怪現象まで・・・」
「・・・もう言葉も出ないよ」

やれやれといった風に首を振るヴァリス。

「ふあぁっぁ～・・・眠い、寝ていいか？」
「わかったよ、向こうについたら起こさせてもらう」
「ありがたい」

そのまま、広い座席に横になり眠り始めるゼノン。

「よっぽど疲れてるんだな」
「いえ、どうやら昨日はあまり眠っていないようですよ」
「なんで？」
「タケミカヅチ戦のシミュレートと戦法の考案、彼なりに考えてきたらしいですよ」
「へぇ～どこからそんな情報を？」
「とある人物に、絶対無茶をさせないようにしてくれ、と頼まれましてね。彼は人より強い・・・それだけ、なんでも背負い込んで無理をしがちになるから、と」
「正体は聞くだけ野暮か？」
「ですね」

遂に帝王が動く――――――目標は、刃ヲ蝕ムモノ『刃蝕皇・タケミカヅチ』

第４話～東南アジア支部～（前書き）

はい、作者です。

前回、書き忘れていたのですが、今回の敵『タケミカヅチ』は滅却師さんのオリジナルアラガミ『イザナギ』をもとに考えました。滅却師さん、ご協力ありがとうございました。

それでは、どうぞ！

第４話～東南アジア支部～

夕日が照らす中、一機のヘリが高台にある建物へと着陸する。その建物の周りには広大な住宅街が広がり、いちばん外側には強固な防壁が備え付けられている。そう、ここが目的地の『東南アジア支部』である。旧時代の地図で表せば丁度タイ付近にあり、辺りは広大な自然に囲まれ、もちろん戦闘エリアも山間などが多数を占めている。

ヘリポートには、シックザール前支部長が来ていたのと同じような服装をした中年の男性がゼノン達を待ち構えていた。

―東南アジア支部―

「初めまして『極東の帝王』。東南アジア支部支部長、リム・スードと申します」

「・・・極東支部・第一討伐部隊隊長、ゼノン・ジョーカーです」

そういって、互いに握手する二人。

「そこまで硬くならんでもいいんですが・・・」

「いえ、かのＦＳＡＴの総隊長殿ですから。ゼノンさんこそ、もう少し砕けてもらってもよろしいかと」

ゼノンが総隊長・・・それは彼にとって初耳であった。思わず、じろっ、とヴァリスを睨みつけるゼノン。一方ヴァリスは、どこ吹く

風といった風に目をそらしてしまう。

（こそこそ）「おい」
（こそこそ）「なんだい？」
（こそこそ）「いつの間に俺が総隊長になってるんだ」
（こそこそ）「仕方ないじゃないか。まさか本部に『面倒だと断られました』なんて言える訳ないだろう？」
（こそこそ）「いや、それもそうだが・・・」

「どうかなさいましたか？」
「あ、いや。何でもないっす・・・」

げんなりした様子でゼノンが答える。

「では、こちらへどうぞ。我が支部の神機使い達を集めておりますので」
「え？」
「ああ、挨拶などは気にする必要はありません。ただ、うちの者たちの希望でして・・・」
「僕らの隊も待機させてあるはずだから、顔合わせと行こうじゃないか」
「へいへい・・・」

そうして連れてこられたのは、極東支部のエントランスによく似た場所だった。聞いてみるとやはり、ここで任務の受注などの事務を

行うらしい。

「あれが極東の英雄か・・・」
「かっこいい！」
「ふん、まだかなり若いじゃねえか」
「お、俺、ちょっと話聞いてこよっかな」

「・・・・・」
「すいません、うちの者たちが騒がしくて・・・」
「まあいいや、ＦＳＡＴの連中は？」
「こっちだ」

ここのエントランスは極東支部と違い、広いホールになっている。極東でいう二階のミーティングフロアが、その奥の方に有った。

「諸君、起立。こちらが、我がＦＳＡＴ総隊長『極東の帝王』ゼノン・ジョーカー大尉だ」

「おい！俺は中尉だぞ！」
「総隊長が、ほかの隊員と同じ位じゃ様にならないでしょ。ほら、打ち合わせ通りに！」
「はぁ・・・」

「俺が、『極東の帝王』ゼノン・ジョーカーだ。今回、タケミカヅチ戦の指揮を執るため、諸君と共に戦うことになった。これから宜しく頼む。早速だが・・・ああもう、いいや」

「堅い挨拶はこれで終い、状況把握に移るぞ。まずは座れー」

慣れないことはするもんじゃない、といった風に、いつもの口調に戻すゼノン。何名かがあまりの変化についていけず、棒立ちしてしまっている。

「おーい、そこ座れー」
「あ、はい」
「まずは自己紹介から行こうか」

ヴァリスの提案で、隊員たちが各々名乗りを上げていく。一通り終わったところで、ゼノンの一言から本格的なミーティングに入った。

「で、遠距離特化はどこだ？」
「自分達です」

そう言って、ゼノンの右斜め向かい側にいた一組の男女が手をあげる。

「タケミカヅチ相手に使用した弾種、及び威力や属性について、明日でいいから簡単なレポにして提出してくれ」
「「了解」」
「新型は？」

「俺達です」
「スタングレネードや罠の効果時間、それと各部位に効いた属性を体感でいい、これもレポにまとめてくれ。ついでに、戦って気づいたことなんかも書いてくれると有難い」
「ういっす」
「了解です」
「あとは・・・これぐらいか。今日はこのあたりで解散」
「「了解」」」
「さて、起立。それでは解散！」

「お疲れさーん」
「部屋に戻るか・・・」
「飯でも食ってこよ」

「随分あっさりしたミーティングだったな。こんなのは初めてだぜ」
「これも帝王君の力かな？」
「やめろよ・・・それよりこれ」

ゼノンがポケットから取り出したのは一枚のデータディスク。不思議そうな顔をしているヴァリスに、簡単に内容を説明するゼノン。

「対タケミカヅチ用の戦法をまとめておいた。明日の会議の時に使えるように、工夫しておいてくれ」
「ああ、そういうことかい。わかったよ」
「じゃ、後は頼む。おれは寝るわ」

そのまま大きな欠伸を一つして、割り当てられた部屋へと引き上げ

る。ゼノンが考えた対タケミカヅチ用の戦法とは、一体どのようなものなのだろうか。

翌日、朝―

―ゼノンの部屋―

コンコン

「Ｚｚｚ・・・Ｚｚｚ・・・」

コンコンコン

「すいません、ゼノン隊長？」

「・・・あい」

半分眠ったままのゼノンが顔を出すと、昨日の遠距離特化の男性がそこにいた。

「遠距離特化型のクレイ・ウェルトと言います。先日のレポートですが、出来上がったので持ってきました」

「ああ・・・ありがとよ。あと、そんなかしこまらなくてもいいぞ？」

「・・・・・」

「どうした？」

「いえ・・・想像とはずいぶん違う人だな、と思ってしまって・・・

」
「ははっ、まあそうだろうな」
「すいません・・・」
「謝る必要はねえよ。俺だって、いい加減この肩書にはうんざりしてるからな。レポ、急がせて悪かった。今度の作戦も遠距離が重要だ、期待させてもらうぜ？」
「任せてください！」

ピピピッ、ピピピッ

「おっと」

突如、ゼノンの隊長用端末が鳴り響く。こんな朝からわざわざゼノンに直通の連絡だ。内容は大体予想がつく。

「はい、こちらゼノン」
『よかった、もう起きてるんだね』
「・・・その様子だと、出たのか？」
『ああ・・・ここから６０ｋｍほど離れた山間部に、やつの、タケミカヅチの反応を見つけたよ』

第４話～東南アジア支部～（後書き）

感想等募集しております。

第5話～激突、刃蝕皇～

―黄昏の村―

山のただなかに村があった。過去形になっているのは、アラガミ出現により、その村は放棄されてしまったからである。かつては交通の要所として、それなりに栄えており、場所が場所なら街と呼んでもおかしくはないほど発達していた。

しかし

現在、家屋はすべて廃墟となり、外側からゆっくりと自然に飲み込まれつつある。かつての栄華の面影は、ほとんど見当たらなくなっていた。その一角が、突然土煙を上げる。土煙が風に吹き飛ばされると、そこには巨大な鬼がいた。

ギャゴオォォォ！！！

鬼の名はタケミカヅチといった。

タケミカヅチ―――雷と刃の神。神話では、他の神と共に地上の荒ぶる神を制圧した事や、人間の夢枕に立ち、神刀を授けたこと等で有名だ。だが、今では逆に、荒ぶる神となって人々を襲うモノの名になっている。

タケミカヅチの前方には、全速力で走り去ろうとする人間たちがい

た。数は3、皆一様に、巨大な武器をその手に持っている。

タケミカヅチは怒りに燃えながら、その後ろ姿を追いかけた。刃の脚で、地面やその他の遺棄物を容赦なく切り刻みながら進む。

何故だ？何故戦わない？

今までの奴らは弱すぎた。

そして今度は、こちらに傷をつけて一目散に逃げ出していく。

逃がさない、必ず喰らいつくしてやる。

しばらく走ると広場の様な場所に出た。突然、真ん中にいた男が立ち止り、くるりとことらへ振り向く。他の者たちはそのまま走り去っていった。そして、タケミカヅチは咆哮を上げる。それは歓喜の咆哮。相手を追い詰めての余裕がある訳でもなく、逆に倒されかけての怒りが含まれている訳でもない。

ただただ、抑えがたい喜びを表すための咆哮。

今、真正面から向かい合う男の目を見て、立ち塞がった一人の人間を見つけて、タケミカヅチは狂喜した。

強い！こいつは！

俺に喰らいつく牙がある！

俺の刃を掻い潜る素早さがある！

俺とぶつかり合うだけの力がある！！

さぁ・・・俺を満足させろ、ゴッドイーター！！！

―ゼノン視点―

でかい声出しやがって・・・そんなに戦いてえのか

「それじゃ、お手並み拝見と行くぜ？」

神機を構え、にらみ合う俺とタケミカヅチ。先に動いたのは向うだった。巨大な前腕部を振りかざし、こちらへ大きく跳躍する。

グギャァァ！！

「っと、危ねえな」

ドゴォン！！

「はぁっ！」

キン！

くっ・・・前腕部はかなりの硬度だな・・・なら

「脚！」

スッ　ズシュゥ・・・

「通らねえわけじゃ・・・ねえっ」

刃を添わせたまま、ステップの要領で後ろ脚まで一気に斬り付ける。

ギャッ！？

「この程度か？」

ゴアアァァァ！！！

「ぬあっ・・・・器用に動く脚だ・・・」

激しく足がうねる。もう一歩引くのが遅かったら、左腕をさっくり持って行かれるところだったな・・・

「掠っただけで、ここまで切りつけられるとはな・・・油断禁物、ってやつか」

ギャオォォォォ！！

ブゥン！

「くっ・・・今度は尻尾か・・・」

唸りを上げて、長大な尾がこちらへ叩きつけられる。俺は大きく飛び退いて、神機を銃形態に変え反撃に出た。

「まずは破砕・・・」

ドドドッ！

銃口からは三発の小型の弾丸が飛び出る。その三発は狙い通り、奴の頭部とその周辺に着弾した。

グアアァァァ！

「それがどうした、って言いたげだな」

あと三秒、二・・・一・・・

ドォン！！ドゴッ、ズドォン！！

ゴオァァァァァァァ！？

設定どおり、着弾から三秒後に大爆発が起きる。

「今なら喰えるか・・・・・そらっ」

巨大な獣の顎のように変形させた神機を、タケミカヅチの胴体に食らいつかせる。同時に、神機を通して力が流れ込んでくる。バースト完了・・・さて、ここからが本ば・・・・

グゴオオオァァァァァ！！！

「なんて威圧感だよ、まったく・・・」

タケミカヅチが立ち上がり、咆哮を上げた。何のことはない、怒りで活性化しただけだ。いつも通りの展開、しかし・・・・冷や汗が滴る。この感覚はいつ以来だろう。本当に倒せるのかという、焦りに似た感覚、いや――――『自分は生き残れるのか？』という、生存本能が上げる悲鳴。

「マジで、こっからが本番みたいだな・・・・」

タケミカヅチ全体が淡く紫色に輝き、体中を紫電が駆け巡る。激昂したタケミカヅチは、まさに鬼神の如くであった。

ゴオオオアアアアアア！！

タケミカヅチが、大きく腕を横に広げて突進してくる。速い。同種のスサノオや、ボルグ・カムランなどとは比べ物にならない。

「うおっ！？」

ブン！！　ドッゴォン！！

突進しながら、その巨大な腕でゼノンめがけて切りかかる。ゼノンは辛うじて避けきったが、バーストモードでなかければ確実に当たっていただろう。渾身の一撃を避けられたタケミカヅチは、その勢いのままに廃墟へ突っ込む。

「速いな・・・・」

グオオォォォ！！

廃墟から、勢いよくタケミカヅチが飛び出してくる。こちらに息つく暇も与えない、素早い行動だ。そして今度は、高く尾の剣を掲げた。まるでスサノオが、大量の光弾を打ち出すときのように。

「・・・・っ！？まさか！？」

ドドドッ！　ドドドドッ！

無秩序に尾の剣を乱射するタケミカヅチ。発射されたそばから再生する剣は尽きることを知らず、辺りがどんどん剣で埋められていく。

「くそっ」

バチバチッ！

「ぐあぁぁぁぁぁっ！？」

ツツー

『・・・ノン君！？気を付けるんだ、その剣は帯電している！』

「今身をもって確認したぜ・・・しかし」

入れ替わりになるように、ゼノンの刃が神威を宿す雷に輝く。

「・・・はあぁぁ！！」

ズバァァン！！

「・・・これで退路は開けた」

ゴアァァァァ！！　ドゴッ

「地面に腕を突き刺した・・・？」

剣の乱射を終えると、タケミカヅチは深々と腕を地面に突き刺した。尾の剣はさらに高く、まっすぐに掲げられる。すると、剣を中心に徐々に激しく放電し始めた。

『これは・・・　！　ゼノン君、今すぐスタングレネードを投げて撤退するんだ！』

「何故だ？」

『説明している時間はない！』
「・・・了解」

切羽詰まった様子のヴァリスに急かされ、腰のポーチからスタングレネードを取り出し、ピンを抜いて相手の眼前へと投げつける。

ギャゴオォォォオオォォォ！？

「迎えのヘリは？」
『そこから１００ｍ程東にちょうど良いポイントがある。そこまで逃げ切ってくれ！』
「了解！」

ゴアアァァァ！！

ドォン！　ズガン！！

怒り狂ったタケミカヅチは、手当たり次第に尾を叩きつけ、腕の剣を振り回す。しかし、すぐにまた腕の剣を突き刺して、先ほどの体勢をとった。

『間に合わないか・・・ゼノン君、辺りに剣はないね！？今すぐ装甲を展開して、思いっきり力を込めるんだ！』
「まったく、なにがなんだか・・・」

素早く反転すると装甲を展開し、その陰に隠れあらんかぎりの力で踏ん張る。

その数秒後

バチィン！！！　ドゴッ！！ズドォォオン！！

「ぐお！？ぐ、うぅぅ・・・あぁぁぁっ・・・・・・」

―ヘリ―

もうもうと巻き上がる土煙。それにすべてを覆い隠され、空からは何も見えなかった。

「おいヴァリス！なんだあれは！？」

「仕組みとしては思い当たる節がある・・・・まずはゼノン君と、タケミカヅチを探さないと！君、レーダーの様子はどうだ！？」

「タケミカヅチは・・・・・！ありました、この場所から離れてい

きます！距離・・・８００・・・９５０・・・・１１３０・・・・・・ロスト！！」
「ゼノンは！？」
「・・・・発見！このヘリから見て三時方向、距離１２０弱！生存反応あり！」
「よし、急行してくれ！」

ヘリが、土煙を吹き飛ばしながら直進する。

「この辺りです！」
「行くぞヴァリス！」
「待ってくださいウィリアム！」

上空３０ｍ程の地点から二人が飛び降りる。まだ土煙が立ち込めており、視界は凄まじく悪かった。その中を進みながら、二人で手分けしてゼノンの名を呼ぶ。

「ゼノン！」
「ゼノンくーん！！」
「どこだ、返事しろぉー！ゼノｎうおあぁ！？」
「ウィリアム！？どうしたんだい！？」
「あ、いや・・・瓦礫からいきなり腕が生えてきたから、つい驚いちまって・・・」
「ん？ああ・・・よかった、動いてるところを見ると、生きてはいるんだね」

ツツー

『・・・どうでもいいからさっさと発掘しろ』

「ごめんごめん、今助けるよ」

まだ瓦礫が崩れていく恐れがあるので、手早くゼノンを掘り起こす。

帝王ｖｓ刃蝕皇―――一戦目は引き分けの形となった。しかし、圧倒的にタケミカヅチの優勢で終結。このままでは、撃退は可能かもしれないが完全に討伐するには至らないだろう。

「ぷはっ・・・ふぅ・・・体中が痛い・・・」

「どうする？」

「って言われてもなぁ・・・まずは、俺が渡したディスクの中身をもう少し煮詰めて、より効果的な作戦でぶつかるしかないだろう・・・総力戦でな」

次の戦いで、果たして決着をつけることはできるのだろうか・・・？

第6話～決着～（前書き）

遅くなりました、すいません

出来はイマイチかもしれませんが・・・これ以上お待たせするのも申し訳なく、更新させていただきました。

それでは、どうぞ！

第6話～決着～

―輸送用ヘリ内部―

「いつつ・・・」
「大丈夫か？」
「火傷と感電・・・なに、三日も休めばすぐ良くなるさ」
「その間に、向こうも回復するだろうけどね」
「それは仕方ねぇよ・・・」

ヘリの座席に横になりながら、ゼノンが呟く。

「それで」
「ん？」

ゼノンが、唐突にヴァリスに話しかける。

「奴の？あれ？は何だ？」
「ああ・・・あの超広範囲爆破かい？」
「そうだ。データにあんな攻撃手段はなかったぞ」
「・・・アーク溶接って知ってる？」
「いや、知らないな」
「僕はね、神機使いになる前に工業系の仕事についていたんだ。アーク溶接と言うのは、電流が通っている物体と、溶接用の素材・・・溶接棒と言うんだけど、これらの間で放電させて、溶接用の素材を

溶かし、それで溶接を行うんだ」

簡易的に文字で表すと

――――電極――――――溶接棒――――――物体Ａ――――――電極――――

こうなる。見てわかるように、棒と物体Ａには電流が通っている。この時、棒をＡに近づけると放電現象が起きる。これがアークだ。この際、非常に高温になり、棒が溶けるので、それを用いて物体を溶接するのだ。

「それと？あれ？に、何の関係があるんだ？」

「ウィリアム、奴はなんで、わざわざ地面に腕を突き刺したと思う？」

「んん？・・・そうか、打ち出した剣と繋がるためか！」

つまり

――――タケミカヅチ――――尾の剣――――打ち出した剣――――――タケミカヅチ――――――

となっている訳だ。この際の線は、腕と各剣につながったオラクル細胞だ。

「・・・で、剣が耐え切れずに爆発したって訳か」

「そう言う事だね」

「あぶねえなぁ・・・」
「だが、あの攻撃の時だけは、奴は完全に無防備になる」
「そう、そこを攻めればいい」
「・・・帰ったらミーティング開くぞ、連絡入れとけ」
「「了解！」」

五日後、タケミカヅチは再び同じ場所に現れた。
しかし、その際採取されたデータには、想像以上の姿が映っていた。
「この短期間で、また進化したと言うのかっ・・・・！」
「・・・俺との戦闘から得た経験を、フルに発揮したってところだな」
肩から背中にかけて出現した、鋭利な甲殻
背部にそそり立つ、発電器官と思しき異様な部位
頭部は、更なる甲殻に覆われ、まるで兜をかぶった武者の様

左右の大剣は、形が若干変化している

「戦いのたびに進化する・・・・いや、戦いのために進化すると言った方が良いかな」

「だが、行動パターンまでは変化していないはずだ・・・作戦開始時刻は、明日九時。ここを出るのは朝八時だ。各隊員に通達頼む」

「了解しました」

―黄昏の村―

ツツー

『αチーム、配置完了』

『同じくβ、完了』

「了解、そのまま待機してくれ」

『『了解』』

「いよいよ、だね」

「腕がなるぜぇ！」

「さっさと終わらせて、俺は極東に帰る」

「ははは・・・」

ツツー

『俺だ、準備はいいな？』

『α、β両チームに告ぐ。お前らが今回の作戦の要だ、何があっても自分の役割を全うしろ。たとえ、俺たち決死隊『γチーム』が全滅しようと、他のチームに負傷者が出ようと、決して動きを止めるな』

『α、了解！』

『β、了解！』

『ま、誰一人死なせるつもりはないがな』

『三秒後、出る・・・3，2，1・・・』

「行くぞ！」

「「了解！」」

隠れていた廃墟から、ゼノン達前衛組――γチーム――が飛び出す。

目の前には、更なる進化を遂げたタケミカヅチ。

「撃(て)え！」

ズガガガガッ！！

グゴアアアアアアア！？

同時に、別の個所から飛び出した後衛組――α、βチーム――が、タケミカヅチに向けて弾幕を張る。目の前に現れたγチームに気を取られていたタケミカヅチは、遠距離攻撃に対して完全に無防備であった。頭部に集中された弾幕で、タケミカヅチが体勢を崩す。その隙に前衛組がバーストモードに入り、脚へと攻撃を始める。

ゴアアアアア！！

タケミカヅチが吠えた。兜はすでに、必要以上の銃撃で穴だらけになり、頭部が露出していた。

『α、β撤退します！』

ギャゴオォォォ！！

「足止めするぞ！」

「はぁっ！」

「せい！」

「くらえぇ！！」

ゼノンが考えた作戦・・・それは、前衛部隊が後衛部隊を守りながら、遠距離攻撃を主体にタケミカヅチを追い詰めると言うものだった。

遠距離主体では距離を詰められて終わり。しかし近距離では、怒り狂ったタケミカヅチの攻撃をしのぐのは至難の業の上、その強固な装甲に阻まれて決定的打撃を与えられない

ならば、後衛部隊にタケミカヅチを近づかせなければいい。

「ぐおっ！？」
「油断するな！」
「受け渡し弾、行きます！」

「オラクル補充急げ！」
「充填完了！」
「よし、もう一度出るぞ！」

ゼノン率いる前衛、γチームが、自らの兜を破壊したα、βへと狙いをつけたタケミカヅチを押しとどめる。そうして時間を稼ぐ間に、後衛はアンプルを用いてオラクルを回復する。

「隊長！アンプル溜まりました！」
「よし、渡してこい！」

γチームは、ゼノン、ウィリアムと新型二人で構成されている。今回、新型二人の神機にはオラクル回収用の特殊装置が装着してあった。こうすることで、半永久的なアンプルの確保が可能になったのだ。

「ふぅ・・・きつくなるな・・・」
「お手並み拝見と行くぜ、ウィリアム」
「ははっ！まだまだ余裕だ！」

「戻りました！」
「馬鹿！足を止めるな！」

ウィリアムが怒鳴りつけるが、時すでに遅く、尾の剣が彼へ向けて突き出されていた。

「うわっ・・・」

ガキィン！！

「ぼさっとすんなよ？」

彼に届く瞬間、ゼノンの神機が、下から尾の剣を跳ね上げる。

「す、すい・・・」

「行け、謝る暇を与えた覚えはない」
「っ！了解！」
弾かれたように飛び出し、脚へと斬り付ける新型。
「ったく、冷や汗が出るぜ」
「悪いな」
「言ったろ、誰一人死なせるつもりはない」
「頼もしいじゃねえか！」
グオオォォ・・・・

死闘が続くこと４０分、ようやくタケミカヅチが弱り始めた

「行ける、行けるぜ！」
「ああ・・・やっぱりあの人はすげぇ！」

「もう少しだな！」
「ああ・・・」
「なんだ？浮かない顔しやがって」
「・・・・」
（おかしい・・・・何故？あれ？を使わない？）

前回の時の、あの超広範囲攻撃――――フツノミタマ、と仮称している――――を、使用する気配がないどころか、そのそぶりさえ見せないのだ。

何かある

彼の直感が、そう告げていた

（奴はまだ、全力じゃない・・・？）

その予感は、確信に変わった。

「濃縮バレット・・・フツノミタマ！！」

新型が、アラガミバレットを発射したときである。背中にある器官が、激しく放電し始め、フツノミタマを吸収したのだ。

・・・・・グゴオアアァァァァ！！！

タケミカヅチ、覚醒・・・！

「下がれ！」

「了かぐあぁ！！？」

バチバチィ！

「しまっ・・・」

ブゥン！

「ごはっ・・・」

新型二名が、放電と振り回された尾によって倒れた。

「ウィリアム！二人をさがらせろ！俺が囮になる！」

「んな馬鹿な、っておい！」

既にゼノンは、二人と反対方向に飛び出していた。誘われるように、タケミカヅチが追跡していく。

「おら・・・よ！」

急に立ち止まったゼノンが、反転してタケミカヅチの頭部へと切りかかる。

が

ガキン！

「なっ・・・」

タケミカヅチが、左の大剣で彼の斬撃を受け止めたのだ。そのまま、硬直したゼノンに向けて、右手の大剣が振り・・・・

ドドドドドッ！

ゴアアアアア！？

「おう、ヴァリスか・・・」

咄嗟の所で、ヴァリス率いるβチームの応援が間に合った。銃撃で、大きくタケミカヅチが体勢を崩す。

「そこだ・・・ふん！」

すかさずゼノンが、背部の器官へと一撃を加える。

バチィン！

「ぐっ・・・なら」

ドドドッ！

バリィン！

一度目の斬撃は、帯電状態にあった器官に弾き返された。電撃は神機に吸い込まれ、双方ダメージはない。ならば、とゼノンは銃形態に変化させ、さらに銃撃を加え破壊する。

ガアァァアアァ！？

器官を破壊された痛みと怒りで、タケミカヅチが暴れまわる。

そして遂に

ガアァァ！

「来たか！」

ドドッ！ドドドドッ！

尾の剣が、周囲に向けて乱射される。フツノミタマだ。一定数の剣を打ち尽くした後、前回と同様、腕の剣を地面に突き刺し、尾の剣を高く掲げる。

「悪いな・・・締めだ」

しかしゼノンには、焦りの表情は全くなかった。

「今回は・・・これがあるっ！」

「神機、解放！！」

ズバァン！！！

グギャアァァアアァァァ！！？

「斉射！！」

『『了解！！』』

ズガガガガガッ！！

ゼノンの絶大な一撃の後、α、β両チームの全力攻撃が加えられる。

・・・・・・・・・・

「・・・・嘘だろ」

後衛班の一人が、そんな呟きを漏らした。無理はない、後衛班全員の銃撃を受けて尚、何事もなかったように立ち尽くすタケミカヅチが居たのだから。

「・・・さぁ、終わりだ」

「隊長！まだ奴はっ・・・」

・・・ゴアアァァ！

案の定、今にもゼノンめがけて右腕を振り下ろそうとするタケミカヅチ。しかし、その剣は振り下ろされない。否、振り下ろせない。

「・・・・・・」

ググッ・・・

無言で捕喰形態を展開し、タケミカヅチの腹部へ突き立てる。その瞬間、それまで全身にまとわれていた電撃と輝きが消え失せ、静かにタケミカヅチが倒れ伏した。

「・・・今日は、仲間もいたしな」

「・・・・よっしゃぁ！！！」

辺りに勝鬨が満ちる・・・

帝王ｖｓ刃蝕皇――――軍配は、帝王側に挙がった。

第6話～決着～（後書き）

ご意見、ご指摘、その他感想などお待ちしてます。

NORN　DETEBASE（前書き）

今回のはおまけみたいな感じで。

思いつきで書きました。本編とは関係ないです。

NORN DETEBASE

N O R N

CATEGORY
アラガミ

【タケミカヅチ】
＞猛々しき鬼神＜の異名を持つ第一種接触禁忌アラガミ。
その姿はスサノオを彷彿とさせるが、体の各部位が刀身化している等、姿形の若干の変化がある。
偏喰傾向は近接神機に偏っており、その異様な姿も、偏喰傾向の影響であるとみられている。

その生態は至って凶暴、ウロヴォロス堕天を単騎で一蹴するほどであり、どのような理由であろうと神機使いの単独での戦闘は禁じられている。

怒り活性化時には全身に紫電をまとい、その突進速度はカリギュラの浮遊突進に匹敵するという。
主な攻撃手段は前腕部の剣と、尾の剣であるが、脚部のロングブレードによる思わぬ反撃もあるので注意されたし。

弱点部位は頭部への破砕と貫通。このアラガミと戦闘する場合、盾役の近接部隊と主軸となる遠距離部隊の最低二個小隊規模が必要となる。

弱点属性：［炎］［神］

呼称：刃蝕皇、刃ヲ蝕ム者

作成可能神機：神蝕剣タキリ　シン　→　神蝕剣タキリ　ミカヅチ
：神蝕銃タキツ　シン　→　神蝕銃タキツ　ライコウ

素材：刃蝕皇ノ荒魂　刃蝕皇ノ刃鎧　刃蝕皇ノ黒兜
刃蝕皇ノ雷剣　刃蝕皇ノ刃　砕かれし神機ｅｔｃ．．．

第八話（前書き）

ずいぶん遅くなってしまいました；

課題や校祭や遠足などなど、イベントやらなんやら重なってしまい書く暇がございませんでした・・・

相変わらず駄文ですが、これからもよろしくお願いいたします

第八話

ラボラトリ、榊の研究室。そこでは、かつてと同じような光景が広がっていた。

「やあ、私の名前はペイラー榊・・・一応、ここの支部長だよ。それでは、座学を開始しよう」
「あ、お願いします」
「すいません」
「なんだい、ええと・・・篠垣コウジ君だったかな」
「はい・・・それで、失礼ですが何故『一応』なんでしょうか？博士は本部から任命されたのでしょう？」
「ああ・・・本当は、ここでアラガミについて研究しているだけのつもりだったんだけどね・・・『事故』で前支部長のヨハンが亡くなって、私に押し付けられてしまったという訳さ」
あわよくば、ゼノン君辺りに変わってもらおうかと思っている所だよ

そう、最後につけたして、榊は講義を開始した。

「知っての通り、今現在進行形で我々は滅亡に瀕している。その原因が、２０５０年代に発見されたオラクル細胞、そしてその群体であるアラガミだ」
「・・・・正確には、２０４６年にオラクル細胞を発見。この時はまだアメーバ状だったが、その半年後にはミミズ状に、さらに四年後には今で言うオウガテイルなどの小型獣型へと進化・・・ですよ

ね」
「すごーい・・・」
「へっ、俺だってそれぐらい知ってるぜ」
「うむ、ほぼ完ぺきだね。予習してきたようで関心関心・・・・しかし、コウジ君の説明には、一か所だけ間違いがある。シンペイ君、何処かわかるかい？」
「へ！？」

大きく身を乗り出して、榊がシンペイを問い詰める。対して、予想外の行動に驚いたシンペイは、度肝を抜かれたような表情だ。コウジもまた、自分の説明に不備があると指摘され、驚いた表情をしている。

「わ、わかりません・・・」
「あの～・・・」
「はい、コトミ君」
「もしかして、だけど・・・・進化の所ですか？」
「正解！よくできたね」
「彼らは進化などしていない、只学習しているだけなんだよ」

約一年前に発した台詞を、もう一度榊は繰り返す。

「事実、彼らのＤＮＡは発見された当時のまま、何一つ変わっていない。彼らは恐るべき速さで学習し、進歩し続けているのさ。空を飛ぶにはどうしたらいいのか、どのような足なら速く走れるのか・・

・そして遂には、我々人間の技術まで取り込み始めた。もっと言えば、光合成しているアラガミも存在しているのだよ」

その言葉に、三人とも驚愕の表情を取っていた。

「さて、それでは次の話に移ろう。まずは、オラクル細胞と人間の歴史についてだ。これも知っている通り、オラクル細胞――――アラガミは、あらゆる物質を捕喰してしまう。これに対して人類は危機感を抱き、彼らを殲滅しようとした。しかし、その殆どが無駄なものだった。その一番いい例が、２０６５年、当時連合軍が計画した旧ロシア地区核融合炉爆破作戦だ。この際、驚くべきことに――――」

コンコン

話の腰を折る様に、ノック音が部屋に響いた。そこへ榊が入室の許可を出すと、顔を出したのは・・・

「榊のおっさん、頼まれてた素材を・・・・って、座学中だったか。わりいわりい」

「おや、丁度いい具合に経験者が登場したね」

「リ、リンドウ教官！」

「おう、お前ら！元気してっか？」

数か月前に奇跡の生還を果たした、雨宮リンドウ少尉であった。

「リンドウ君、少し昔語りをしてくれないかい？」
「え？何でまた・・・」
「経験者は語る、と言うやつだよ」
「・・・その代り、今度の実験は無しで」
「む・・・まぁ仕方ないか」
「よぅし、それじゃあ何でも聞いてくれ！」

・・・榊が半分涙目になっているのは気の所為であろうか。

「ああ、あの作戦か・・・・」

それに構わず、リンドウはゆっくりと話し出す。

「２０６５年、俺と姉上・・・ツバキ教官、それにソーマの三人でロシアへと飛んだ――――」

―旧ロシア地区、連合軍作戦司令基地―

吹き荒れる吹雪の中、一機のヘリが、連合軍の基地に着陸する。ドアに描かれるのは、オオカミを模した独特のエンブレム。

ガタン！

「「・・・・」」

そのドアが開き、ヘリから二人の大人の男女と一人の少年が降りてくる。手首には血の様に紅い腕輪が。

彼らは『ゴッドイーター』――――突如出現した荒ぶる神々を屠るために、選りすぐられた人類の希望、？神を喰らう者？

「フェンリル極東支部の方々ですね！」

着陸誘導を行っていた若い兵士が、降りてきた彼らに声をかける。大声になってしまっているのは、何分吹雪がひどいため仕方がある
まい。

声をかけられた方は、無言で肯定の意を示した。

「お待ちしておりました！どうぞこちらへ！」

そのまま、同じ兵が内部へと連れて行く。

その様子を窓から見ていた連合軍大尉は、憤慨した様子で電話の相手を糾弾した。

「どういう事ですかな、シックザール支部長？この重要な作戦に送られてきた極東支部の応援は、たったの三名だと、そう本部に報告しろと？」

『落ち着いてください、大尉殿』

対して電話の相手――――シックザールと言う男は、随分と落ち着いた雰囲気で答えた。

『彼らの働きは、一人一人が一個大隊に相当すると自負しています。それに、今回は貴方がた主導の作戦だ・・・うちの支部は、後処理担当が本領ですから』

「くっ・・・しかし！」

『それに、恥ずかしながら今回が私の愚息の初任務でしてね。よろしく頼みますよ？』

ブツッ　ツー、ツー、ツー・・・

「若造め！調子に乗りおって！」

ドン！

大尉と呼ばれた男性が、電話を投げ出して、更に机に拳を叩き付けて怒りをあらわにする。

「あれがアラガミに対抗できる唯一の存在、『神機使い』だと！？ただのガキに優男、それに女ではないか！」
「まったく、腹立たしい限りですね。あのような連中に取って代わられるなどと」
「ふん、認めさせはせんよ。この作戦が成功すれば、な」

そう呟くと、部下である痩せた男を連れて、大尉は会議室へと歩を進め始めるのであった。

―リンドウ視点―

「今回の作戦は、ユーラシア大陸のアラガミをこの核融合炉まで誘導し爆破することにより、一気に殲滅する手はずの、かつてない大規模な作戦である」

おうおう、核爆発ですか。危なっかしいねぇ・・・アラガミを殲滅できたとしても、人間が住めなくなったら元も子も無いってのに。

「フェンリル支部より派遣された神機使いの諸君には、アラガミを目標地点まで誘導する、いわば羊飼いの役目をお願いすることになる」

「あれが神機使い？」
「見ろよ、一人はまだガキだぜ」
「ふざけやがって・・・」

その他声には出さないが、白い目でじろじろと・・・いやになるね、まったく。

「うっわ・・・敵意剥き出しっすね、姉上」
「・・・当然だろうな、見ず知らずの若造たちにいきなり自分たちの仕事を奪われるのだから」
「そんなもんすかね・・・ハァ・・・」

「おい少年！今回が初任務なんだろ？リラックスして、気楽に行こうや」
「少年じゃねえ、ソーマだ」
「おおっと、こいつは失礼・・・・もう一丁前らしい」
「からかうのはよせ、リンドウ」
「了解・・・・」

仕方がないので、さっき火をつけたばかりの煙草をくわえる。しかし・・・ソーマ、か。

「・・・・！！」
「？」

どうした・・・いきなり立ち上がって。

「おいソーマ、いきなりどう・・・」
ズドォン！！　ヴーッ！ヴーッ！
「「「うわぁぁ！？」」」
「・・・きやがった！」
「なに！？」
「ええい、これはどういう事だ！」
『核融合炉にアラガミ軍が強襲！！このままでは、爆破を前に融合炉が喰い尽くされます！！』
「なんだと・・！！」

あらまぁ・・・・奴らにはセンサーか何かついてんのか？

「・・・俺たちが刃向う事すら許さねえって訳かねぇ」

「神機使い！今すぐ向かって奴らを食い止めろ・・・食い止めてもらいたい！」

「了解しました。行くぞ、ソーマにリンドウ」

「了解っす、姉上」

「・・・」

「ほ、本当ですか！？」

「ああ、いざ作戦開始って成った直後・・・奴らは融合炉を襲撃した」

「・・・有り得ない」

「嘘だろ・・・・」
「それでどうなったんです！？」
「勿論、俺たちはすぐにヘリで出撃したさ・・・」

タタン！　タタタタッ！
ギシャァァァ！！
グオオアアァァァ！！

「ひ、ひぃっ・・・」
「く、来るなぁ！！」
「この・・・化けもｎぎゃあぁぁ・・・・」

リンドウ達がヘリに乗って向かった時点では、既に地上は地獄絵図と化していた。その場しのぎのアサルトライフルを、余裕の表情で跳ね返し、一方的に軍の人間たちを蹂躙し、喰い尽くすアラガミ達。その正確な数は夜闇にまぎれて把握出来なかったが、かなり大量のアラガミによる侵攻を受けているのは明らかだった。

「状況はどうなっている？」
「現在アラガミは、第一次装甲を突破・・・第二次防衛ラインで交戦中です」

リンドウ達神機使いを送り出した後、大尉と少尉が融合炉制御室まで歩きながら情報の確認を行う。

「融合炉の臨界まで、あとどの程度かかる？」
「急点火しましたが、まだ全体の４０％程しか・・・臨界までは時間がしばらく必要です。只今神機使いどもを向かわせたので、それなりに時間は稼げるかと」
「ふん、それまで奴らに張り付いてもらうしかあるまい・・・」
「ええ。いざとなれば、羊飼いもろとｍ」

ズドォン！！　ガッシャァーン！！！

「な、なんだ！？」

二人の会話に割り込んだ存在・・・・それは黒い卵型のアラガミ――後にザイゴートと呼ばれるものであった。

「下がってください大尉！！この、死ｎ」

ウウォーーーン！！

少尉が、その先の言葉を紡ぐことは無かった。なぜならば・・・

上半身を、丸ごとその巨大な口腔に呑み込まれてしまったのだから

「くっ・・・・この化け物め！！！」

辺りにまき散らされる血をものともせず、勇ましく大尉が怒鳴りつける・・・・いや、ただ単に目をそらしていただけなのかもしれない。

目の前に存在する、確実な死を。

ギシャァァァ！！

タタタッ！　タタタタン！！

ゴオォォォ！！

「うようよいやがる！」

眼下を見下ろし、思わずそう呟くリンドウ。

「融合炉の準備が整うまでの時間稼ぎだ！覚悟はいいな！？」
「ちっ・・・羊にしては随分凶暴そうだ・・・」
「いくぞっ！！一匹も通すな！！」

ダッ！

ツバキの声を合図に、ヘリから飛び降りる三人。まずソーマが、手始めに降りる真下にいたザイゴートを、その巨大な刃で叩き割った。

ザシュッ！！　ギィィィィィィ・・・！？

その悲鳴を聞きつけて、周囲のアラガミ達の目線が一斉にリンドウ達に集まった。

ウゴオォォォ！！　ギシャアアァァァッ！！

「さて・・・行くかぁ！！」

大きく神機を振りかぶり、目の前のオウガテイルに突撃するリンドウ。遂に、神と人間の戦が始まる――――――

「あのころは、まだ奴らも今ほどしぶとくは無かったな。大抵一撃で沈んでいた」
「今とはえらい違いだな・・・・」
「だね・・・」

リンドウ達神機使いが投入されたことにより、戦況は一気に優勢に傾いた・・・・・訳ではなかったが、幾分かはましになったようだ。しかし、何分相手の数が多い。ちらほらと、しかし確実に人間の悲鳴が響き、途絶える。この乱戦の中、周囲へ警戒には限界があった。

「おらぁ！！」

体のバネを生かし、大きく回転して空中のアラガミ――――サリエルを切り落とすと、地上にいる猿人――コンゴウのパンチを受け止め、逆に脚へと反撃するリンドウ。その傍らでは、ツバキが戦車の様なアラガミを相手に銃撃戦を繰り広げていた。ソーマはと言えば、巨大な尾を持つアラガミ、ボルグ・カムラン相手に速さ勝負。高速で繰り出される尾をかわし、その頭部に痛烈な一撃を加えた。

その行動、まさに神速。

「なんだあいつら・・・本当に、人間なのか？」

その様子を見ていたひとりの兵士が、呆然とした様子でそう呟いた。その隙に、一体のコンゴウがその兵士に馬乗りになり、大きな口を開けて頭から・・・・・

ドスッ！！　　ギャアァァァ・・・・・

「下がってろ！！」

「あ・・・あぁぁぁぁぁぁぁ・・・・」

すんでの所でリンドウの助けが入る。その隣では、序盤に倒したザイゴートをソーマが捕喰していた。

その光景は、一般人である彼らからして、あまりに人間離れして見えた。

一方その頃、大尉は瀕死の重傷を負いながらも制御室へとたどり着いていた。おびただしい量の血を流し、片足を引きずりながらも苦しげな声で、部下の兵士たちへ無線を送る。

「全兵、士に告ぐ・・・・・総員、退避せよ・・・・・・繰り返す・・・・総員、退避せよ！」

その無線を聞き届けた兵たちは、負傷者たちを抱えて一目散にヘリへと搭乗し、避難していく。リンドウ達がその動きに気付いた時に

は、既にすべてのヘリが飛び立った後だった。

「おいおい！？なんであいつら退いて行くんだ？！」

「くそっ・・・私たちは見捨てるつもりか・・・・」

その様子を見て、ツバキが苦虫を噛み潰したような表情で吐き捨てる。

「・・・まだくる」

「っ！」

「ちっ・・・」

ソーマの言葉通り、外周には減ることを知らないアラガミ達の大群が群がっている。今リンドウ達が退けば、それこそあっという間に融合炉は喰い尽くされてしまうだろう。

「くっそぉ！このままじゃもたねえ！」

その台詞とほぼ同時に、大尉が爆破スイッチを渾身の力で押す。

「・・・化け物どもめっ！！」

果たして、その『化け物』とはアラガミ達の事か、それとも・・・・・

ゴゴゴゴゴ・・・・・

低い駆動音を立てながら、融合炉が急激に加熱されていく。直に大爆発を起こし、ここ一帯を吹き飛ばすだろう。

誰もが、そうなることを信じて疑わなかった。

・・・・ピーーー!!!

「アン、ノウン・・・?!」

「・・・・・そ、それで！？」
「どうなったんですか？」
「・・・辺りのアラガミ達が、一斉に形を崩して融合炉へとへばりついた。そのまま包み込むようにして、融合炉ごと爆発を『喰った』」
「「「・・・・・」」」

「ま、そのおかげで俺たちはここまで生きてられたんだけどな！要はあれだ、相手は規格外な奴らだが、諦めなけりゃどうにかなるってことだ」
「そうだね、人間がアラガミに勝っているのは、希望を諦めていないからだ。君たちはその希望となり、これからもアラガミ達と闘ってもらうことになる」
「は、はい！」
「・・・なんか、やる気が出て来たぜ」

「最低限の役割は果たしたいと思います」

三者三様ではあるが、誰もが神機使いとして戦うことを決意した。

「それじゃ、最後に一言頼むよ」
「あ？え～っと、それじゃ」

「いついかなる時も、生きる事から逃げるな。必ず全員でアナグラに帰ってこいよ！！」
「「「はい！！」」」

第九話（前書き）

どうも、ｃｌｏｗでございます。

いやはや、ずいぶん遅くなってしまいました・・・申し訳ございません。この年になって、ようやく年末の忙しさを味わった気分です。

さてさて、以前の活動報告で仄めかした打ち切りの件ですが・・・今回のオリジナルアラガミ戦を最後に、いったん『帝王譚』を完結させていただきたく思います。これ以上やると２の世界観等に影響が出そうなので－－－あ、多分２の二次も書くと思います。その時は、また宜しくお願い致します。

第九話

「榊支部長！」
「おや、どうしたんだい？いつになく慌てているじゃないか」
「ほ、北東アジア支部より応援要請！新種のアラガミにより・・・・旧中国・南部小支部が壊滅したとのこと！」
「・・・・相手のアラガミについてのデータは？」
「目視では、クアドリガ種とヴィーナス種の双方の特徴を保持しているようで、重火器を中心としたクアドリガ系統の容貌を強く残しているらしいです」
「わかった・・・また彼に働いてもらうことになるようだね」

「――ええ、はい。了解です！ご協力感謝します！」
「どうだ？」
「上手くいきました！応援の神機使いを三人、こちらに派遣してくれるそうです」
「そうか・・・ふう、これで一安心だ。彼らにもこのことを伝えなければ」
「準備が整い次第、明日にでもヘリで向かうそうです。あ、派遣される神機使いのデータが届きました」
「これは・・・かの帝王殿が来てくれるとは・・・」
「今回の件、意外と早く決着がつきそうですね」
「ああ」

「こら、起きろ。そろそろ例の場所だ」

ガツン

フードをかぶった少年――いや、そろそろ青年と言うべきか――が、座席で横になっている同年代と思しき少年の頭を小突く。それをそばで見ている男性は、新しい煙草に火をつけながら、苦笑しつつその光景を見守っていた。

煙草を吸う男性の名は雨宮リンドウ、奇跡の生還を果たしたベテランゴッドイーターだ。小突いた方の少年はソーマ・シックザール。前極東支部長ヨハネス・フォン・シックザールの忘れ形見であり、弱冠十二歳から前線で神を喰らう、これまたベテランのゴッドイーター。そして小突かれた方の少年こそ、三人の中では決定的にゴッドイーターとしての歴史は短く、それでいて恐らくは他の二人の実力を凌駕しうる『帝王』の名を冠したゴッドイーター――――ゼノン・ジョーカーだ。

「いてっ・・・・手荒い起こし方だな・・・・」
「この程度の移動で寝る方が悪い」
「まあそう言うなソーマ、こいつも何かと疲れてんだからよ。この前も本部の連中に召喚されて、なんやかんややってたしな」
「上の連中は頭が固くて困る・・・」

つい先日の事だ。遂にゼノンが、ＦＳＡＴの隊長として機能していないことが本部の重役委員会に知られてしまった。

『ＦＳＡＴ『暫定』隊長であるゼノン・ジョーカーは、直ちに本部へ出頭せよ。その功績に於いて前回までの不祥事は不問とし、正式に隊長へと任命する。また、同時に二階級特進として『少佐』の位を与える』

これが送られてきたのが、現在から見て二週間前。それを昨日までゼノンは、のらりくらりと再三警告する本部の辞令をかわし続け、ついには本部側から使者（捕獲要員）を出張させるまでに至った――――直前に榊博士によって渡された、彼の極東支部におけるアラガミ討伐貢献度等々のデータが無ければ、今ここに彼は居なかっただろう。

「今回みたいに、呼びつけられたら出るって言ってるのによ・・・」
「そうやって後手後手に回っちゃ、何時かしっぺ返しを喰らうぞ？」
「多分、それは俺の代じゃない」
「どうだか・・・」

ソーマは相変わらずの調子に苦笑するしかないようだった。あんなことを言っているが、本当にやばいときはこうして――――応援要請から半日もたたないうちに――――ヘリで飛び出していくことを知っているからこそ、先程の様な軽口も叩けるというものだ。

「ようお二人さん、？あれ？が件の支部跡みたいだぞ」
「・・・壊滅、か」
「これまた・・・派手にやってくれたな・・・」

小支部とは、アラガミの活動が確認される管轄外の地区へ遠征形式で送り出される神機使いの集団の事だ。もちろん、拠点となる場所には対オラクル防壁で作られた建築物が用意してある・・・・が、今回のアラガミ、恐らく第一種接触禁忌種の襲撃を受けた其処は、見るも無残な有様となっていた。

大地に空く無数のクレーター――――
無残に破壊された砦と、そこに辛うじて引っかかり、風にたなびく破れたフェンリルの旗――――
もとは神機であったであろう何かの破片――――
そのすべてが、ここに存在していた生を否定し尽くしていた。

「あーあ・・・・またしても厄介な」
「またそれだな、新種が出るたびそう言ってないか？」
「ま、こいつの言うとおり新種は厄介だって言うのは、前々からのお約束だ」
「ですよね、リンドウさん」

「しかしまぁ・・・そいつを『喰う』ために俺たちが呼ばれたんだ。期待には答えてやらねえとな」

悲惨な光景から目をそらし、雲一つない快晴の空を見つめながら、ゼノンはまだ見ぬ新アラガミへと思いを馳せる。

ゆっくりじっくりと、帝王はその牙と爪を研ぎ始めた。

第九話（後書き）

短くてごめんなさい；；

多分今年最後の更新ですね、面目ない・・・でも、数パーセントの可能性ですが更新するかもしれません（オイ

それではみなさん、よい年を・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8882v/

GEB ss　～極東の帝王譚～

2011年12月21日01時54分発行